



全身黒づくめで『オリヒメ』を手を持つ吉藤オリィ。この「黒い白衣」は、高校卒業後、私服を用意する必要に迫られ研究者らしく白衣を着たとき「なぜ白衣は白くなきゃいけないのか？」と疑問を持ち特注。以後、このスタイルを貫く。『オリヒメ』本体のみは、月額3万円程度(要見積もり)でレンタル利用できる。吉藤オリィ(30歳)ロボットコミュニケーター自身の引きこもり経験をバネに、「孤独を解消する」難題に取り組む若きロボットコミュニケーター、吉藤オリィは、途方もない難題と向き合っている。「孤独を解消する」というのだ。

そのために開発したのが、高さ約二十センチメートルで重さ約六百グラムと、手のひらに載る分身ロボット『オリヒメ』である。その顔や腕はパソコンやスマホで遠隔地から動かすことが可能で、「うんうん」「いやいや」「おはよう」などとボディランゲージを使うことができる。頭部にカメラがついているので、相手の顔や周囲の様子が離れていてもわかるほか、内蔵されたマイクとスピーカーで会話もできる。病気で寝ていたり、何かの理由で外出できな

くても、自分の代わりに会社の会議で発言をしたり、学校の授業に出席してくれる。自分がそこに行けなくても、似たような振る舞いを『オリヒメ』にさせることで、人と人のコミュニケーションを支援するのです」『オリヒメ』の顔は能面がモチーフになっている。能楽師が無表情な能面をつけながら、その技で喜怒哀楽の表現をしていくように、『オリヒメ』も顔や腕の動きで感情を表し、声のやり取りをすることで、テレビ電話などとは違う臨場感を出すことができる。

そうした解説をする吉藤は、言葉を聞き漏らしてしまいそうな早口でしゃべり続ける。そして『オリヒメ』を使った男性が社会参加できるようになった例を話し始めると、倍速再生のように、早口に拍車がかかった。「私のオリィ研究所には、四歳のときに交通事故に遭い、以後二十年間寝たきりだった番田雄太という社員がいました。彼は自発呼吸ができないため呼吸器をつけた状態だったのですが、岩手県盛岡にある自宅から『オリヒメ』で東京のオフィスに“出勤”し、会議に出席したり、私の秘書などをしてくれていました。『オリヒメ』に腕をつけるアイデアや、ボディランゲージをより豊かな動きにするアドバイスは彼からもらいました。残念ながら、二〇一七年九月に亡くなってしまいました。

彼はまったく学校に行ったことがなかったのに『オリヒメ』を使うことで、うちの契約社員として働き、その給料で母親に服をプレゼントしたり、明治大学の授業に参加するなど、従来の頸椎損傷患者では考えられないような人生を過ごしました。そして番田に触発され、社会に参加したいという人が現れたのです」

これまでは病気や怪我で寝たきりになると、そのまま過ごすのが当たり前とされていた。同じ場所で過ごし続ける寂しさや、家族など支援者に負担をかけている心労は本人を著しく苦しめる。自分は生きている意味はあるのかなど絶望的な孤独を感じ、心身ともに衰弱していくからだ。『オリヒメ』は、病気を克服できるわけではないが、孤独を癒やし、生き続ける希望を与える。

吉藤は、筋力が低下し、最終的には死に至る ALS(筋萎縮性側索硬化症)や SMA(脊髄性筋萎縮症)など難病患者などに向けて、目でパソコンを操作する装置『オリヒメ アイ』も開発した。この入力装置のおかげでパソコンの操作が可能になり、絵を描くソフトで創作活動が可能になった ALS 患者もいるという。「ALS で寝たきりになり、筆が持てなくなったにもかかわらず、元気に作品を作り続けている男性がいます。彼の絵をツイッターで投稿すると、四万ツイートもの反響がありました。こうした前例があると、自分も挑戦しようと希望を持つ人が増えてくる。こうした希望の好循環を作ることで苦しんでいる人を支援したいんです」

こうした難病患者の支援だけでなく、『オリヒメ』は会社に出社せずに働くテレワークでも活用されている。「出産や介護などで職場を離れなければいけなかった人が会社に出社しなくても、『オリヒメ』で会議やミーティングに参加できるんです。書類を作るのは家のパソコンでもできるので、フルタイム勤務と同じとはいかなくてもそこそこの仕事はできる。また介護や育児ばかりで外の世界から遠ざかるとストレスを感じるのですが、これを和らげることができる。仲間の感覚は失わずに済むので、会社への帰属意識が薄れなかったり、職場復帰しても人間関係が損なわれないなど、人材を繋ぎ止めておける観点からも『オリヒメ』は評価されています」

難病支援、テレワークのほかに吉藤が力を入れているのは、学校での活用だ。

「人前に出るのが怖くなってしまったパニック障害の男の子がいました。その子は人には会えないけれど、オンラインゲームはできる。ゲームの中でのチャットはできた。ならば、いきなり雑談は無理だけれど、その世界観のなかでの会話から始め、親睦を深められた人と段階的にやり取りができるようにする。そういうことをだんだん重ねていくと、その後に『オリヒメ』で会話ができるようになる。現在少しずつですが、フリースクール、特別支援学校、私立小学校などで引きこもりの子どもたちに活用してもらっています」

「黒い白衣、には大型ポケットがあり、携帯型パソコン、スマホ、メガネ、ペットボトルなどが収納されている。本当に新しいことはルールを更新できる

何かの事情で外出ができなくなり、人との関係が持てなくなる。こうした経験を吉藤自身が小学生から中学生の頃に経験した。そのときの様子を自著『「孤独」は消せる。』(サンマーク出版)で、〈気が遠くなるほど天井を眺め続け、不安におしつぶされないために何も考えず、時間が経過することばかりを待つ経験〉と、振り返る。一步間違えれば自ら命を絶っていたかもしれない。

その吉藤が考える孤独とは、どういう状態なのか。

「一般的に孤独は、家に一人であることや、ひとりぼっちをイメージしますが、私は一人であること自体は悪いとは思いません。ゲームをしたり、絵を描くことを楽しんでいる人もいます。私も集中して作業するのは楽しいですから。一人かどうかは関係なくて、自分は誰からも理解されていない、誰からも忘れられたのではない、自分は無力だと孤立状態になり、それを辛いと感じている精神的に不安定な状態、これが私の定義する孤独です。吉藤は「孤独を解消する」ためのツールとして『オリヒメ』や『オリヒメ アイ』を開発した。彼は、学生時代に電動車椅子を作り、コンテストで優勝するなどしていたが、これも外出ができずに孤独を感じている人のために役に立ちたいという動機で作られたツールのひとつである。何かの技術や部品があり、それを活かすためにロボットを作ったわけではない。ましてやロボットが成長分野なので参入しようとして、研究するのとも違う。いま世間では、さまざまなロボットが商品化され話題になっているが、そうしたものと吉藤が作るものが違うのは、彼に明確な使命感があること。結果的にビジネス化しているが、それが目的ではない。それゆえ次々と他とは違う新しいアイデアが出る。

橋本保「いまどきの若いもん」解体新書」より抜粋